

【17】 “天然温泉” 談義

ゴールデンウィークに、温泉に入りたいと思ったのですが、観光地は混雑するので、近くの東京湾埋立地の"天然温泉"に半日行ってきました。

湯に浸かりながら、火山地帯から離れた低地の東京に温泉のある理由がわからず、貼ってあった効能書きを読んでようやく了解しました。

ここでは、なんと地下 2000m の 50 万年前の第三紀の地層の地下水というか地中水を汲み上げているとことで、温泉水に含まれている成分は海水と同じです。50 万年前の海水ということで、海水の化石です。

地球は内部からの熱で、火山地帯でなくても 100m 深くなるごとに 2～3℃の割合で地温上昇があるので、2000m というと仮に 100m 当り 2℃としても 2000m で 40℃になり地表面での東京の平均気温 17℃を加味すると湯温 40℃以上の立派な温泉となります。

近年、東京に限らず埼玉県東部、千葉県北部など火山に縁の無い土地でも、人為的な大深度ボーリングの汲み上げ温泉が増えています。

古典的な火山地帯、あるいはその影響のある地域で湯の湧く温泉を「火山性温泉」というのに対し、非火山地域で、地温のみで加熱された地下深くからの温水を泉源とする“温泉”を「非火山性温泉」といいます。

しかし、地球上どこでも地中深くボーリングして湯が出ればそれは温泉であるといわれると、それぞれの場所での特異性、固有性、歴史性などのストーリーが一切無く全く有難味が感じられません。

伝統的な温泉の概念と異なるもう一つのタイプの“温泉”に、湧出するときの温度は暖かくなく通常の地下水と変わらないのですが、水中にミネラルなど特別の成分が溶け込んでいる場合は、それを加熱して入浴するというのがあります。

以前は、「鉱泉」とか「冷泉」（れいせん）とか云われていたようですが、1948 年（昭和 23 年）の温泉法で正式の「温泉」と認められています。

これは不合理ということではなく、国際的にはそういうタイプのものも温泉に入れているようです。

付言すれば、温泉法にいう温泉の定義では、25℃以上の温度のもの又は一定の成分を含むものを温泉と称しています。

しかし、特別の水質とはいえ、冷たい水も沸かして温泉なら、普通の井戸水や水道水を加熱して温泉を名乗る不心得者が現れるのもわからんではありません。

最近よく見かける“天然温泉”なる呼び名はウチは本物の温泉という主張なのでしょうが、中身を分析するとよくわからない言葉です。